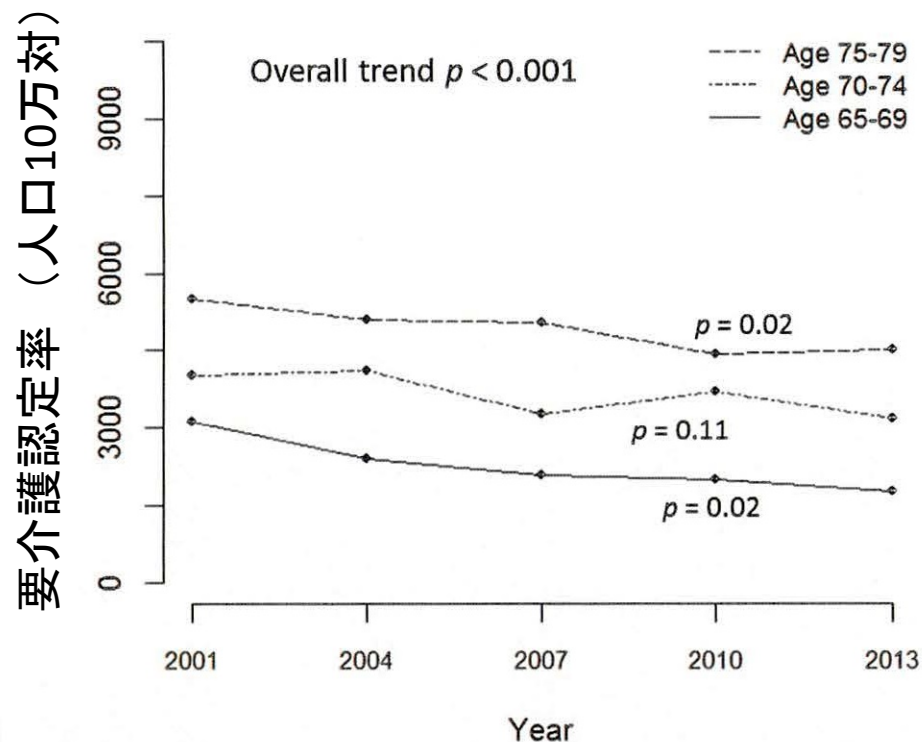
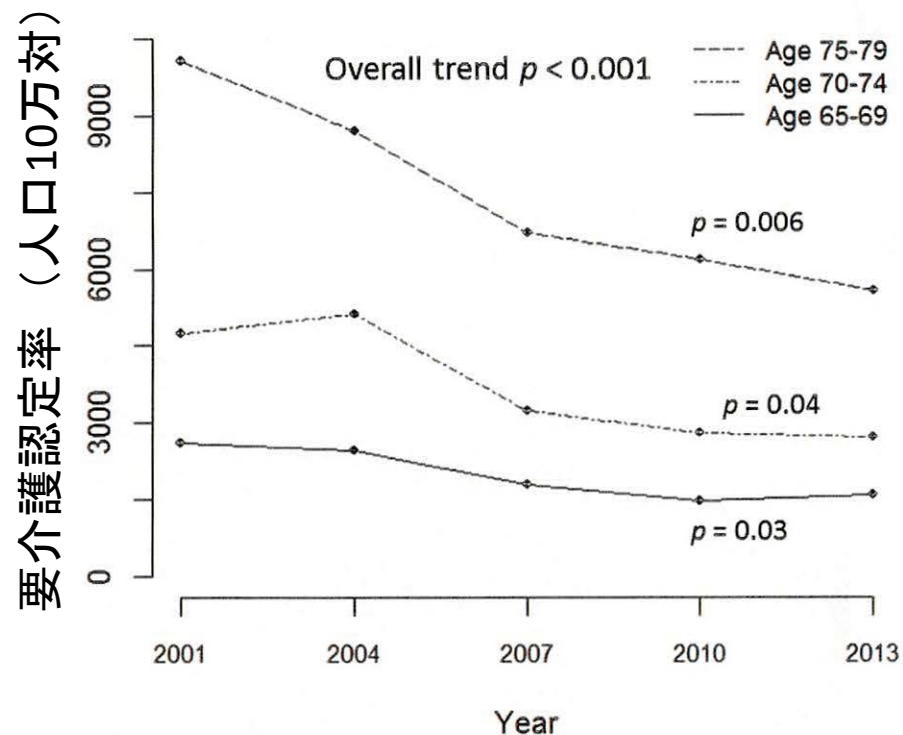


要介護認定率(要介護1以上)の推移

要介護認定率（男性）



要介護認定率（女性）

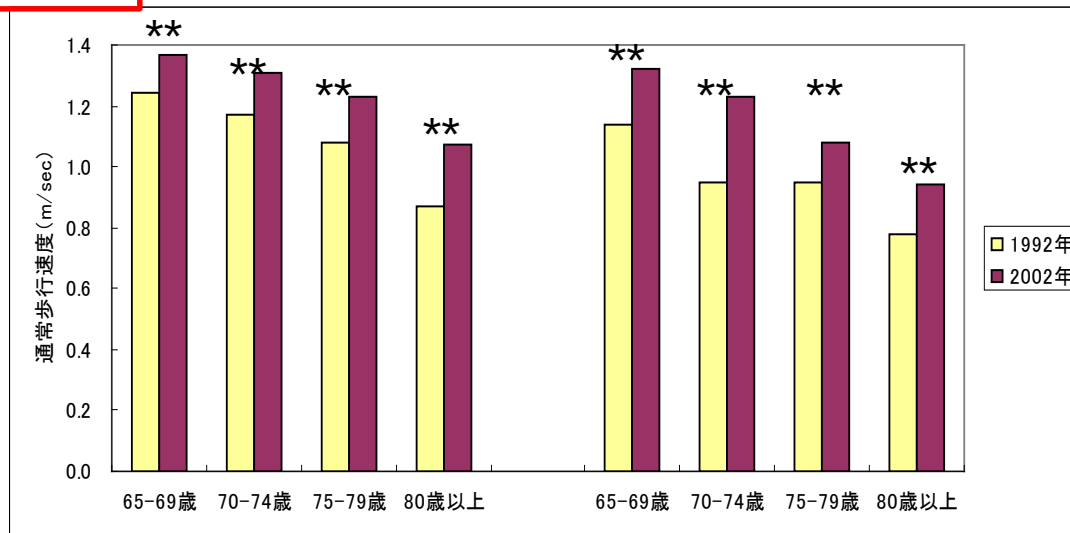


まとめ

- 多くの慢性疾患の受療率は65-79歳の高齢者において近年低下している。
- 要介護認定率、死亡率も同様に低下している。
- これらの結果は、高齢者の健康状態の改善と、疾患にもよるが、5～10歳の生物学的年齢の低下を示唆する。

2) 体力・生活機能 の変化

通常歩行速度の差異 Walking speed

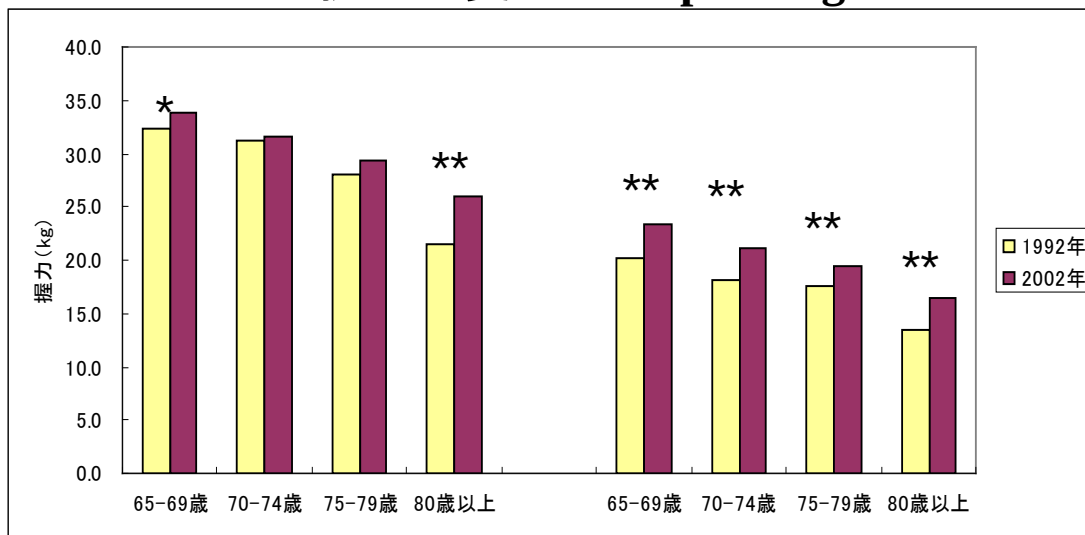


(**p<0.01)

男性

女性

握力の変化 Grip strength



男性

女性

*p<0.05

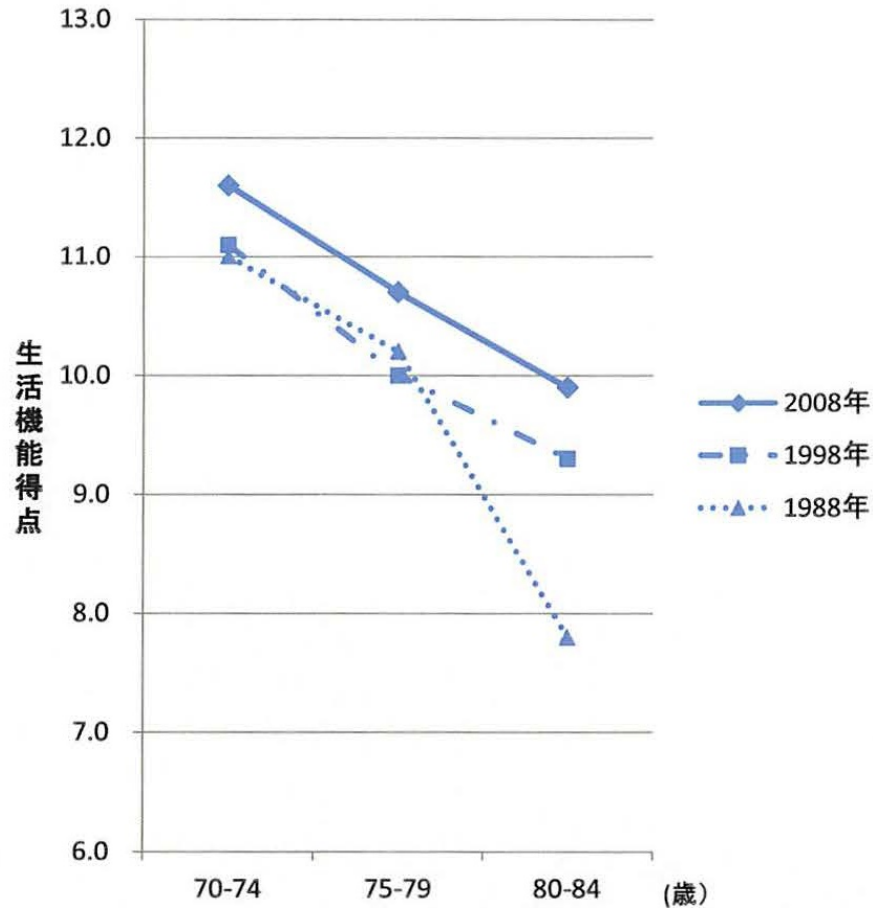
**p<0.01

(鈴木隆雄他：日本人
高齢者における身体機
能の縦断的・横断的変
化に関する研究、厚生
の指標 2006)

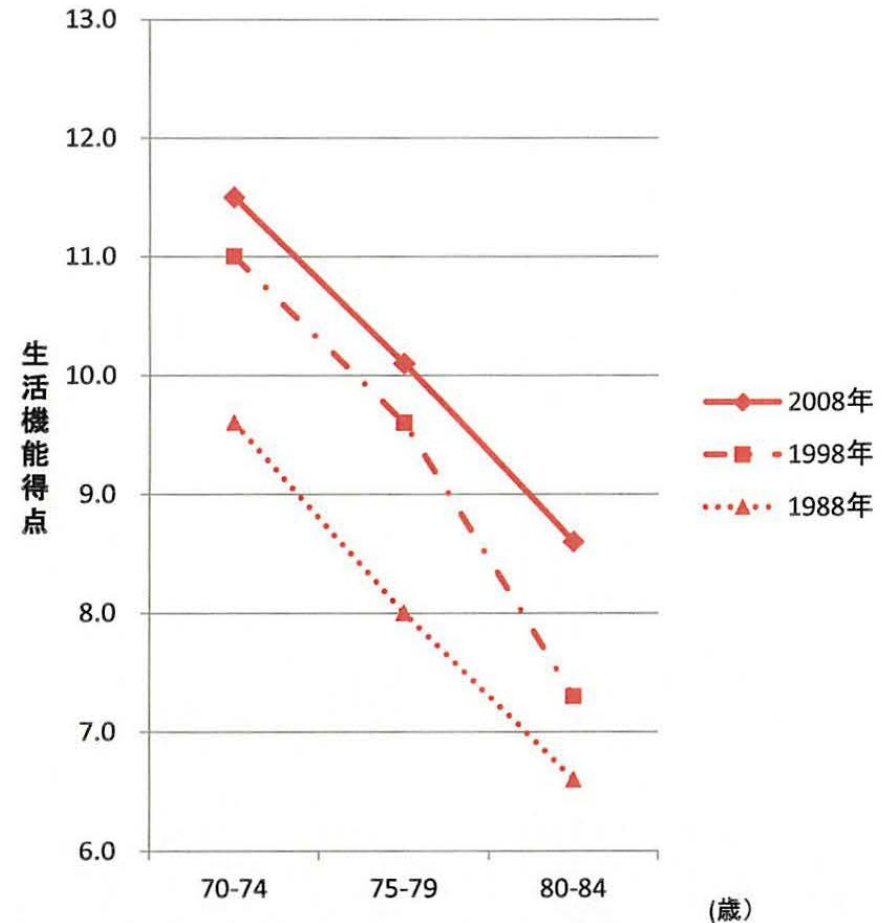


生活機能の時代差

男

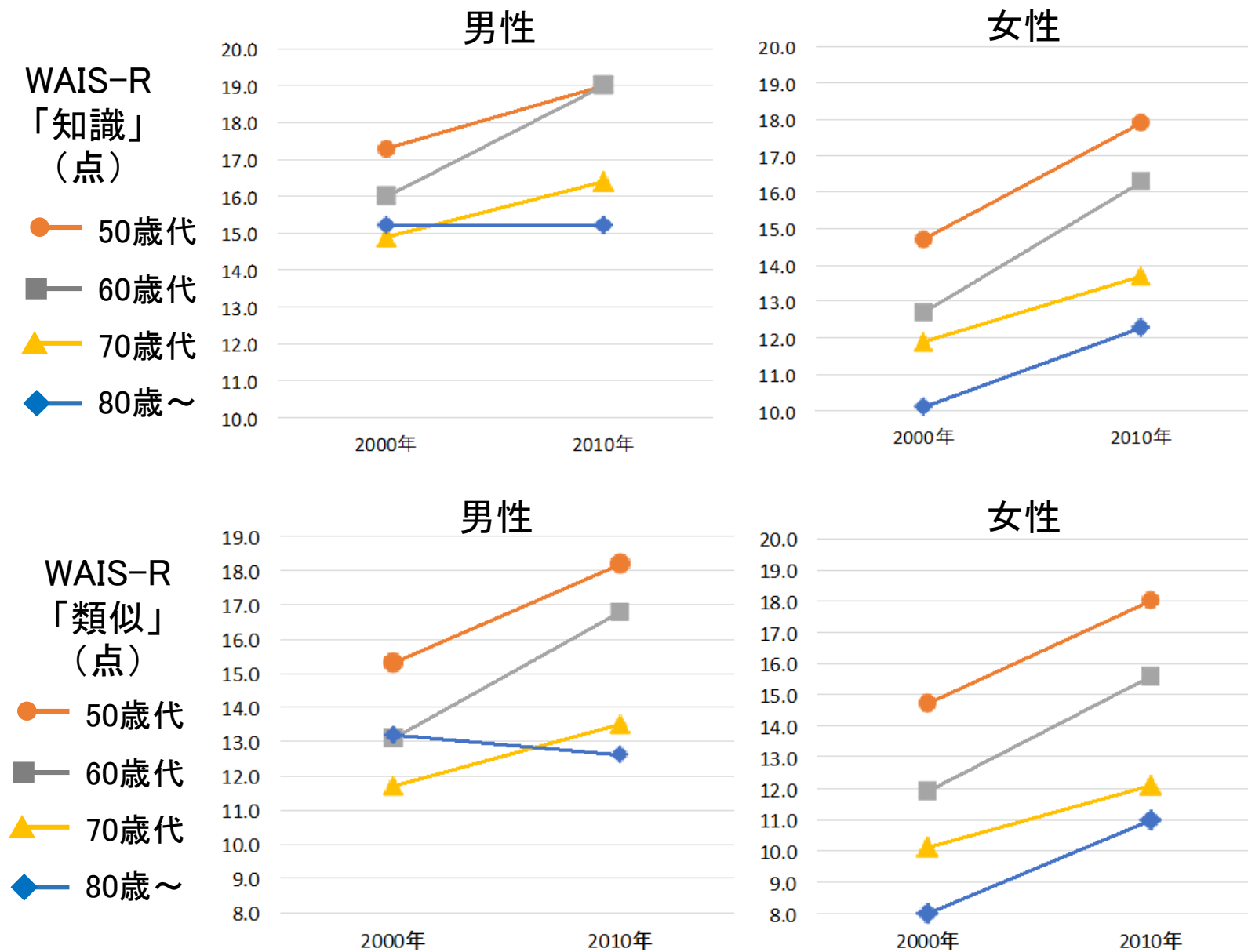


女



(芳賀 博: 東京都健康長寿医療センター研究所「中年からの老化予防
総合的長期追跡研究(TMIG-LISA)」より)

3) 知的機能の変化－1

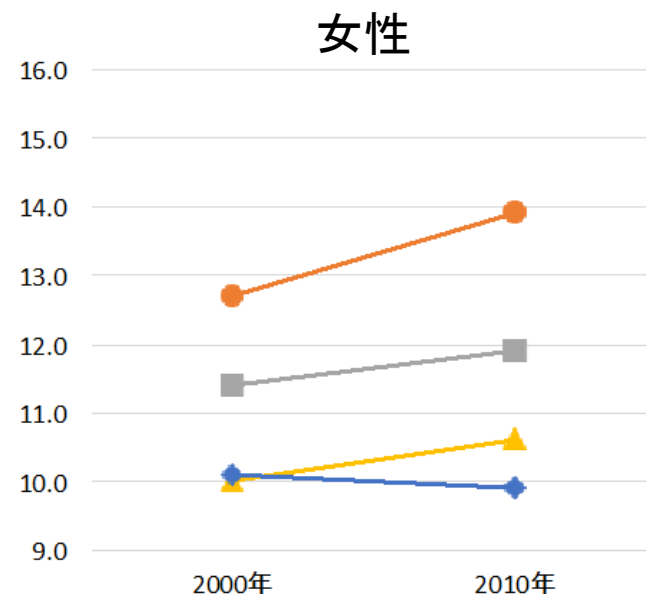
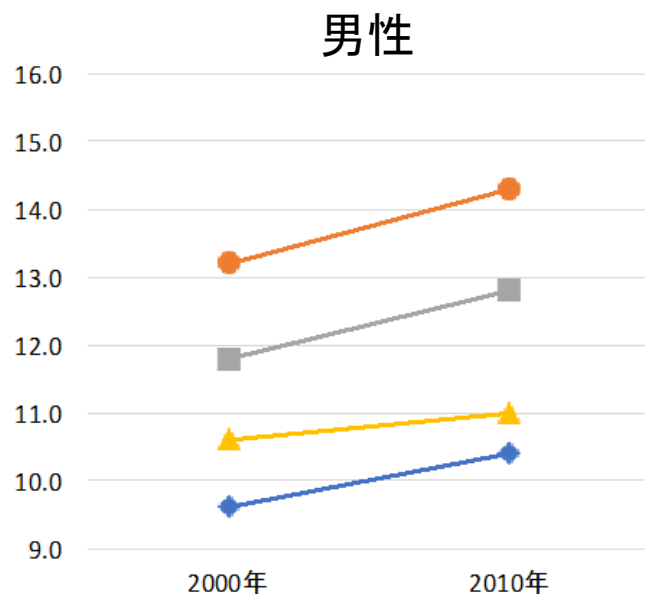


(国立長寿医療研究センター 老化に関する長期縦断疫学研究(NILS-LSA)より)

3) 知的機能の変化－2

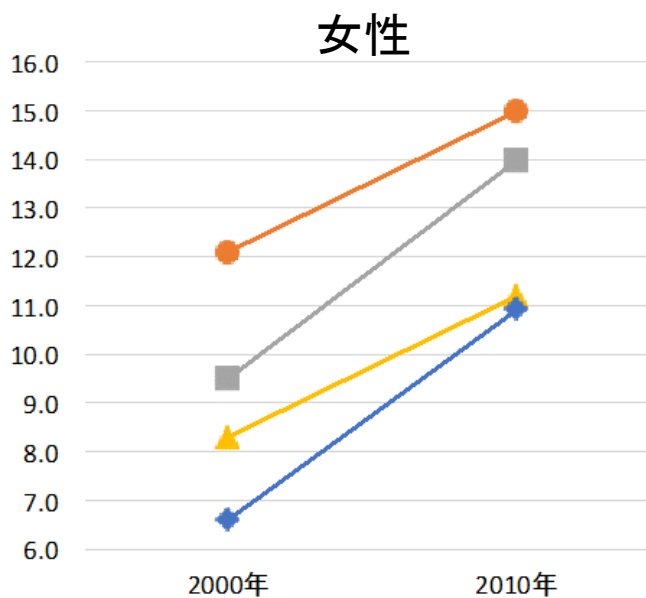
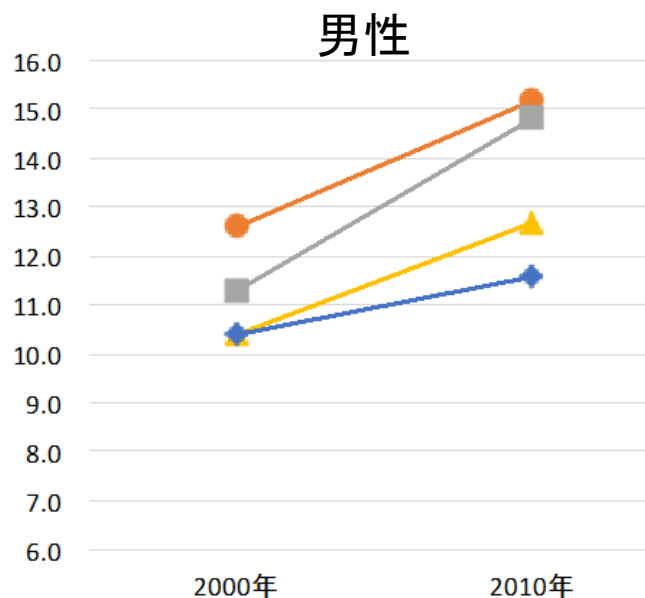
WAIS-R
「数唱」
(点)

- 50歳代
- 60歳代
- ▲ 70歳代
- ◆ 80歳～



WAIS-R
「絵画完成」
(点)

- 50歳代
- 60歳代
- ▲ 70歳代
- ◆ 80歳～



(国立長寿医療研究センター 老化に関する長期縦断疫学研究(NILS-LSA)より)

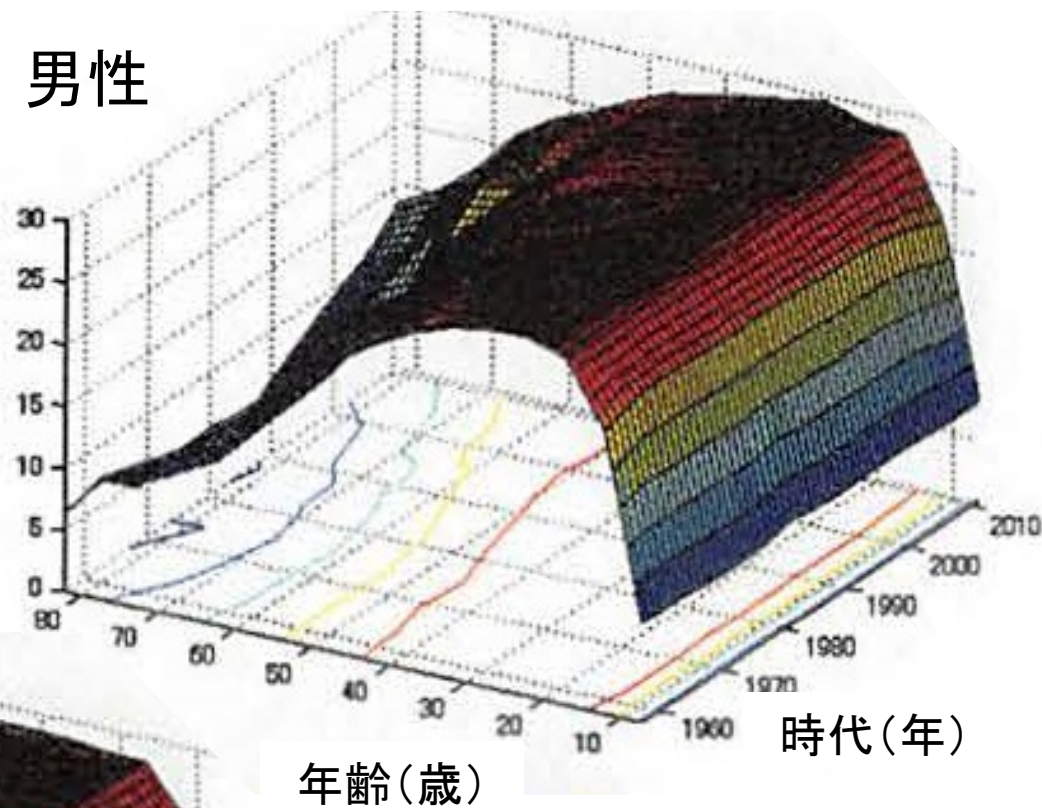
知的機能のまとめ

- ほとんどの下位検査得点において、この10年あまりで、10歳程度分の平均得点の上昇がみられる。
- 言語性知能に分類される問題は、50, 60代の得点の伸びが著しく、60代と50代の差異が小さくなった、またはなくなった。
- 70代は、10年前の60代に相当する平均得点になっている。
- 動作性知能に分類される問題は、老年期に比較的大きな低下が生じることが知られているが、言語性知能と同様の結果が得られた。
- とくに60代の平均得点の上昇が著しい
- 多くの問題で、近年得点のピークが40代ではなく50代～60代に移動している。→ 40代～60代は同等の集団とみることができる課題が多い。
- 70代も得点の上昇が著しいものの、2010年時点では、60代とは平均得点に差がある。

4) 歯数の変化

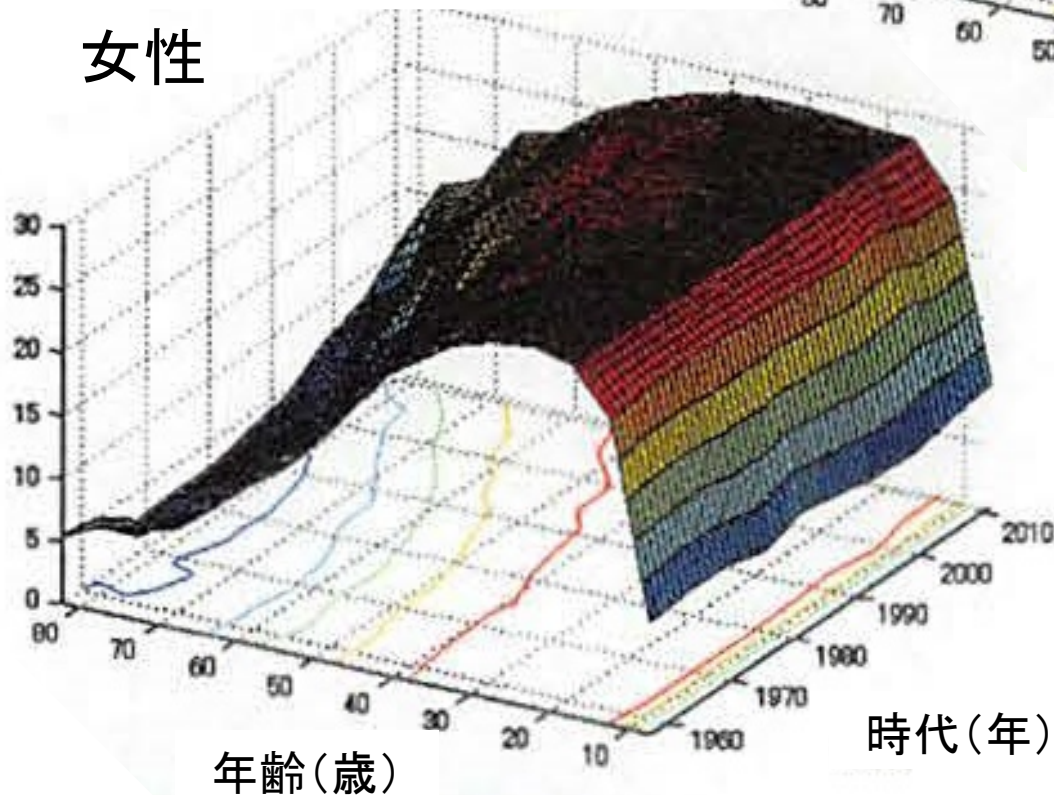
男性

歯数(本)



女性

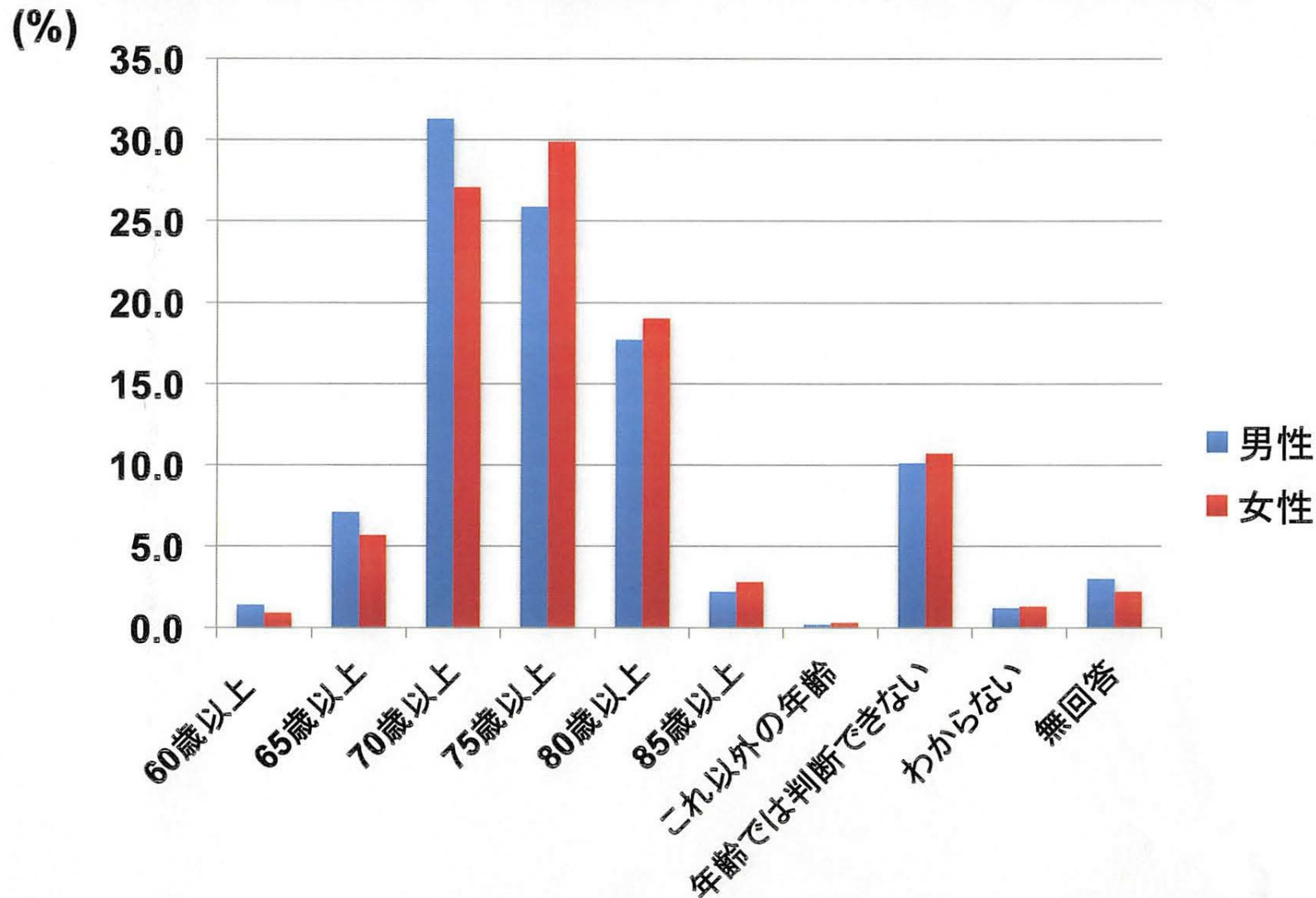
歯数(本)



(那須郁夫, 中村 隆:日本人
永久歯歯数のAge-Period-
Cohort分析)

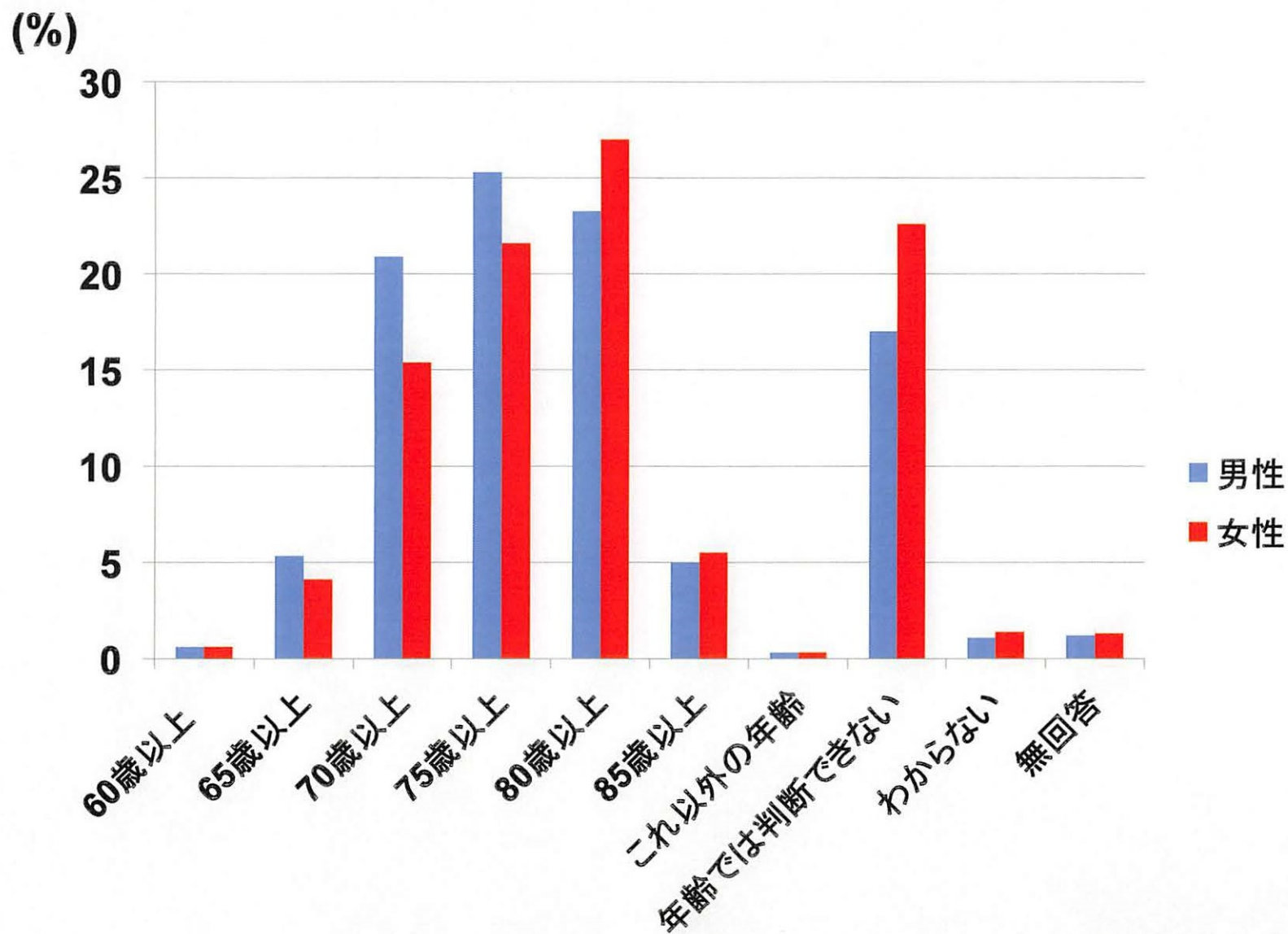
5) 国民の意識

高齢者とは何歳以上か(男女別割合)



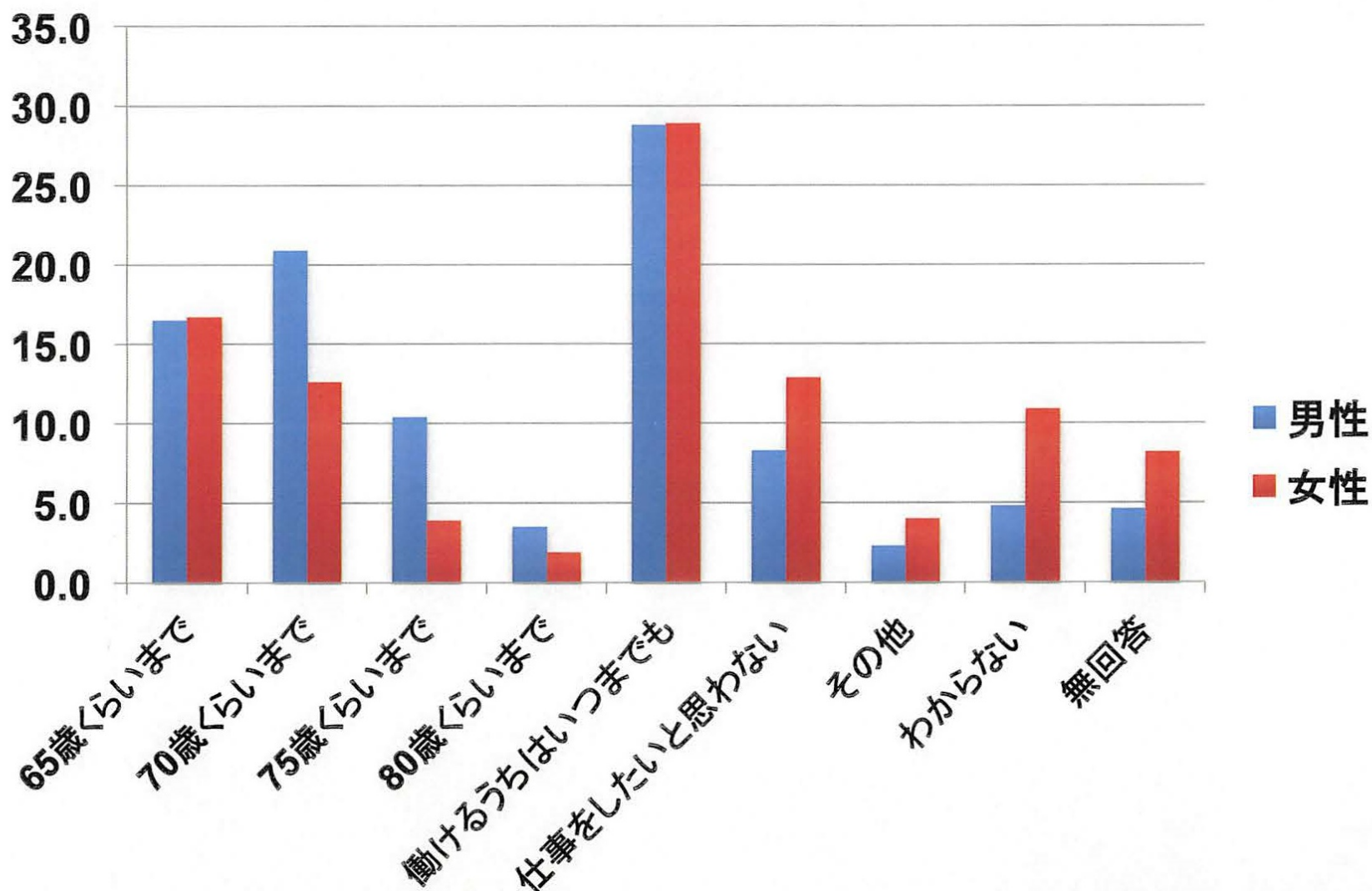
(内閣府:平成26年度 高齢者の日常生活に関する意識調査)

支えられるべき高齢者とは何歳以上か(男女別割合)



(内閣府:平成26年度 高齢者の日常生活に関する意識調査)

何歳ごろまで収入を伴う仕事をしたいか(男女別割合)



(内閣府:平成26年度 高齢者の日常生活に関する意識調査)

6) 社会学的見地から

- 社会的には、加齢にともなう社会的地位と役割の変化がエイジングである。
- 特定の社会的地位と役割の変化を経験した人が「老いた人」である。
- 現代社会では暦年齢で「老いた人」の定義をすることが広く行われている。さらに、暦年齢によって地位・役割の加齢変化が起こされることも少なくない。

→ 社会生活の加齢変化の場合、それを遅らせることがすべて望ましいとは限らない。多様性を認めるべき。



現在の高齢者の定義

65～74歳	前期高齢者	young-old	高齢前期
75～89歳	後期高齢者	old-old	高齢後期
90歳以上	超高齢期	extremely old super-old	超高齢期

新しい高齢者の定義に関する提言

65～74歳	准高齢者	pre-old	准高齢期
75～89歳	高齢者	old	高齢期
90歳以上	超高齢者	oldest-old super-old	超高齢期

提言：75歳以上を「高齢者」と定義する



新しい高齢者の定義に関する提言の意義

- 「高齢者」の暦年齢区分を75歳以上とすることは、精神・身体活動能力に関する時代的变化、現在の国民の意識と一致している。
 - 「高齢者」の定義の年齢層を引き上げることは、健康長寿延伸の成果として捉えることができる。
 - 「准高齢者」を新たに設定することは、最長寿国日本において元気で活動性の高い年齢層の幅が広がったことを、世界に発信する契機となるだけでなく、国民の感覚に即した意識変革の契機となる。
- 「准高齢者」の多くは社会の支え手、モチベーションを持った存在であり、自主的な社会参加をさらに促す契機となれば、社会の支え手を増やすことができる。
- 社会の高齢化のイメージを、明るく活力ある超高齢社会とイメージできる契機としよう。

高齢者の定義を見直すにあたっての 課題

○身体能力の改善は未来永劫続くか？

→次世代への警鐘

○若年層との競合？

○社会保障政策への影響は？

○多様性を重んじることが重要